

2025（令和 7）年度 教養学部国際教育学科 一般選抜（中期） 講評

〈出題意図〉

課題文は、大学卒業後のキャリアに直結しうるとされる STEM 系の諸専攻の人気の高まる一方で、米国の大学の教養課程で教えられているリベラルアーツ科目、特に古典精読演習（グレート・ブックス・セミナー）の価値が疑問視される現状に対し、その意義を再説することを趣旨としている。出題の意図は、アカデミックな英語表現を正確に読解する力に加え、教養学部の学生になる者として、リベラルアーツの価値とはなにか、大学に行く目的・意味とはなにか、そして古典を読むことと現代の社会情勢の関連とはなにか、といった問いを考え抜く力や論理的な表現力をみることである。

〈評価のポイント（長文問題）〉

問 8

本文において、著者らが自説に対する批判として想定している内容を、日本語で簡潔にまとめられているかをみた。具体的には、STEM 系の科目とは異なり、ただちに有用性を発揮するとは限らない人文学の古典をカレッジ・大学で学ぶことは、多額の授業料という投資に見合うものではないという、本文でも取り上げられているポイントを含めたい。この通りの内容ではなくとも、論考の趣旨に沿った批判を書いたものについては、部分点を与えた。

問 9

著者らが支持しているリベラルアーツの価値を正確に把握できているか、また、それを日本の教育環境において実現するアイデアを創造的に提案できているかをみた。古典を精読し学生や教員と議論することは、古い雑多な知識を得るためではなく、社会の成立基盤となっている普遍的な価値を学びとり、それによって善き市民となること、これがリベラルアーツの価値だというのが本文の主張である。これを踏まえた上で、では米国ではなくてそれを日本で実現するにはどうすればよいか、という具体案を出してほしい（例えば、西洋の作品だけではなく、アジアの古典も読むなど）。日本の教育の一般的な問題点や、それに対する改善案を書く答案が複数見られたが、それらは本文の趣旨を捉えたものとは言えない。問題文をよく読み、何が問われているかを十分に意識していただきたい。

〈答案の傾向〉

問1 半分程度の正解であった。英文の意味を読み取る力が不足している。

問2 比較的良好にできていた。次にくる言葉が *thinking* と名詞なのに、名詞を入れてくる解答も散見された。文法の基礎をしっかりと学んでほしい。

問3 半分程度の正解であった。英文の趣旨を正確に読み取れていない。

問4 比較的良好に答えられていたが、偉大な思想家の著作について批判的な議論を通じて、民主的な振る舞いを備えた市民が形成されるという点はおさえてもらいたい。

問5 概ねよくできていた。

問6 文中の *no less than* の意味をとれていない解答が散見された。文法やイディオムの学習を頑張ってほしい。

問7 概ねよくできていた。

問8 本文の内容を踏まえて、という指示にもかかわらず、本文にまったく書かれていない理由を述べる解答が目立った。

問9 リベラルアーツの価値を実現する教育の日本版、という問いの趣旨に答えている答案が非常に少なかった。自分が用意してきた、理想の教育論を書く人が多く、問題の指示に関連させていない答案が多かった。基本的な単語のつづりを間違える例も目立った。